

令和2年度 地域でつながる家庭教育応援事業

# 地域家庭教育推進県北ブロック会議 (第1回)

日時：令和2年6月16日(火) 14:00~16:00  
場所：福島県教育会館「第1会議室」

## 「自己肯定感の形成について」

座長 福島大学人間発達文化学類教授 原野 明子 氏  
情報提供 本宮市放課後子ども教室指導員 伊藤 豊子 氏  
福島市学童クラブ連絡協議会会長 山田 和江 氏

本県の家庭教育推進上の大きな課題である「親の学び」を支援するために、各郡・市(町村)PTA連合会・地域代表・企業代表による県北ブロック会議を実施した。「face to face~自己肯定感を形成するためのコミュニケーションの在り方」を主なテーマに位置付け、協議を行っていく。

第1回目の今回は、本宮市放課後子ども教室・福島市学童クラブ連絡協議会からそれぞれ情報提供をいただいた。自己肯定感を形成するためのコミュニケーションには何が必要かを、構成員がそれぞれの立場から考えるとともに、家庭への支援をどのように進めていけばよいかについて活発な意見交換がなされた。

### 1 情報提供

本宮市 放課後子ども教室指導員 伊藤 豊子氏

「地域・学校支援を行ってきた20年あまりの経験の中から」

#### (1) ブロック会議の構成員として

- ① 校長先生方や様々な先生方から貴重な意見を聞いた。
- ② 民生委員、児童委員、地域の評議員としての活動や自分で立ち上げた「本宮むかしむかしの会」の経験の中から情報を提供することができた。



#### (2) 子育てとボランティアとの関わりについて

- ① 「うちの子はおとなしくて手がかからない。」と言う人がいる。果たしてそうだろうか。吉岡たすく先生の言葉「1人の子どもを育てるのには、みんな同じ時間がかかるのだ。」が自分の子育ての参考になった。子どもが成長していく中で、必ず手がかかる時期がある。成長した子どもがつまずきを乗り越えるためには、親がたくさんの時間とエネルギーをかけて関わっていくことが必要になる。
- ② 「手をかけること、気をかけること、言葉をかけること」がボランティアの基本精神。

#### (3) 子育てが終わってからについて

- ① 様々な研修会や講演会に参加。大友靖子さんとの出会い。
- ② ファシリテーターという学校支援のボランティアに応募し、地域のボランティア活動を始めた。

#### (4) 学校との関わりについて

- ① 学校支援が始まり研修を受ける中、「地域の人が入り込んでいる学校には、不審者は入らない」という言

葉に背中を押されてがんばった。

(5) 放課後子ども教室立ち上げについて

- ① 本宮市の合併と同時に当時、市の社会教育主事であった小林先生と一緒に子ども教室を立ち上げた。「そろそろファシリテーターをやめようか」と思っていた時期だったが、積み上げてきた人脈を活用し子ども教室に携わってくださる方を探すお手伝いを行った。

(6) 人と人とのコミュニケーションについて

- ① 本宮地域の4つの小学校のコーディネーターとして5年間活動する中で、親たちが子どもを他の場所に預け慣れていると感じる。
- ② 預け慣れていると、「親のいいとこどり」につながり「子どもは親の顔色を見る」ようになる。我が子が起こした悪いことを他人のせいにしてたり、自分自身が満足するまで苦情を言ったりするのは恐ろしいことだと思う。いつかは親が自分で子どもの面倒を見なくてはならないときが来る。そのときに泣かないようにしておくことが大切。子育ての時期はいろんなことに気を向け、親子ともども成長する時期である。

(7) 新型コロナウイルスによる休校について

- ① 2ヶ月の休校中、親御さんは、子どもと向き合うことについて、多くを経験したのではないだろうか。
- ② 子育てにはものすごいエネルギーが必要。今まで子どもにかけべきエネルギーを自分のために使っていた親もいたのではないだろうか。エネルギーを子育てに使っているふりをしている親もいる現状である。今、生活習慣を変える中で、子どもに向き合うエネルギーを十分に蓄え、子どものエネルギーを受け止める必要がある。

(8) 終わりに

- ① 子どもとゲームがこの休み（コロナ禍）の中で、切り離せない物になったと感じる。今のゲーム機械は、1時間できちんと切れるように設定できるという。そういう機能があることをもっと広めていかなければならない
- ② これからもできるかぎり、地域や学校のボランティアを続けていきたいと思っている。

ご自身の子育てや放課後子ども教室の立ち上げと運営、新型コロナウイルス感染による親と子、地域との関わりなど今の家庭教育に何が大切なのか具体的に提示していただいた。

福島市学童クラブ連絡協議会会長 山田 和江 氏

「様々な家庭に接してきて感じること」

(1) はじめに

- ① 新型コロナウイルス感染症の影響による学校休業期間中、毎日8:00~21:00まで学童を開き、子どもたちを預かっていた。

(2) 様々な家庭に接してきて感じること

- ① 子ども達が問題を起こした時、親には言わないで欲しいという子が多いと感じる。また親の顔色を見たり、嘘をついたりする子が少なくない傾向にある。
- ② 親の考えがその場しのぎ。
- ③ LINE やメールでのやり取りが多く、問題が発生した時のアプローチが短絡的な解決策のため、言葉の難しさを感じる。
- ④ 人間関係の希薄化。
- ⑤ 子どもは親や大人の姿をよく見ている。親の会話をよく聞いている。学童の中でも昨日の夫婦の話題について話し出す。



(3) 事例紹介

子どもどうしのトラブルが親同士のトラブルに発展。保護者同士が連絡手段としてLINEを主に使用したため、トラブルがより深刻化した事例。

#### (4) まとめ

##### ① 問題点

ア 保護者同士の意識の違いによる対応の難しさ。

##### ② 支援者として

ア 自分たちが支援者として、「生きた教科書」になりたい。

イ 学校との連携・協力は必要。しかし、先生方に頼るだけではなく、支援者としてのスキルを高めていきたい。

ウ 子どもは、「学校」「家庭」「学童」それぞれでの顔が違う。でも、どれも「子どもの顔」である。その違いに気づけるようにしたい。

学童クラブにおけるトラブルを解決していく中で、電話やSNS等を使用したため、より深刻化した事例から、顔と顔をあわせてコミュニケーションを図ることの大切さについて紹介していただいた。

## 2 意見発表・意見交換

- 子ども同士のトラブルの際、保護者どうしへの指導が本当に難しい。保護者は、メールやLINEという手段を取りたがる。やはり”face to face”の大切さを感じた。学童は、働くお母さんの最後の砦である。ご苦労が多いと思うが、ぜひ、危機管理をしながら取り組んでいただきたい、自分も支援をしていきたいと思っている。
- 一番はコミュニケーションの大切さだと感じた。価値観や立場の違いを踏まえて対応するという仕事の大変さを感じた。「親が子どもを預け慣れている」という話について、休みであっても自分の子どもを預けっぱなしになっているのは自分でも気になっていることである。職場では、家庭と仕事のバランスがとれるように配慮していきたいと感じている。
- 養護教諭の先生が「子どもには、いくら手をかけても、かけすぎることはない。だから手をかけていくべきだ。」と話していたことを思い出した。「子ども」の時間は短い。だから自分も「手のかけすぎ」はないと思った。
- サポート体制や世の中の仕組みが大切な役割を持っていると思う。ブロック会議があるたびに思うことは、たくさんの大人がたくさんの子どもに関わることができる仕組みづくりをすることだと思っている。その仕組みをこの会議を通して考えられるといいと感じている。これから事務局がリーダーシップをとって、たくさんの機関・団体との連携をどう図っていくかということを考えていってほしいと思っている。
- いろいろな場面で地域が子どもに関わることで、子どもは「ほめられた」「認められた」と思う。そうして子どもの自己肯定感が育まれていることを感じる。
- 伊藤さんは、心を込めて愛情いっぱい子どもに接している。「手をかける～」ということについて、いい言葉をお聞きしたと思っている。自分自身も地域に帰ったら、この言葉を目標に掲げたいと思っている。
- よりそう“face to face”の大切さを改めて感じた。臨時休業中の際にできることとして、H30年度の県北地区ブロック会議で作成した「家庭教育応援メッセージ」にある心温まる言葉を学校だよりの中に掲載して、「家庭の中でこんな言葉をかけ合ってください」というメッセージとともに保護者に配付した。
- PTAの代表としてできることは「伝えていくこと」だと思っている。今日聞いた話をどんどん伝えていきたい。LINEとメールは便利なのだが、表情が伝わらないし、冷たく感じるツールでもある。直接会って話すことの大切さをほかのPTAの方々にも今後伝えていきたい。
- 保護者からの苦情について思うことは、やはり大切なのは”face to face”であるということ。保護者にとっては、学校に来るのは足が重いと思うが、学校に来ていただき、お話ししていただくことが大切だと思っている。その際、どんな親御さんでも「子どもを思っている気持ちは本気である」という思いを持って、保護者に話をお聞きしていきたいと考える。

- 昔は、子どもたちには家庭と地域と学校という環境しかなかったが、今の子どもたちはいろいろな環境の中で育っている。両親が共働きであるために、学童や塾やスポ少など、様々な人と接し、窮屈な思いをしながら成長していると感じている。そういう中で複雑ないじめが発生し悩みを抱えている。
- トラブル表面の現象だけを見るのではなく、しっかりと保護者についてプロファイリングする必要がある。保護者の思いに共感して認めてあげる。そうすると保護者自身の自己有用感につながっていく。
- 親子関係をきちんと築き、最後まで子どもの話を聞き、自分も子どもに対して話をするのが大切である。
- 子どもがトラブルを起こすということは、自分に関心をもってほしいというサインである。
- 子どもの自立を図るために、親子関係をきちんと築きあげていく子育てができればいい。
- これまでのご苦労に頭が下がる。コロナ禍の中で親子関係はどうなっているかは、警察からは見えにくい。しかし、今までできなかった親子の関わりがたくさんあったことだろうと察している。
- 事例は、親が子どもへ実質的に手をかけていないと感じた。子どもは地域・親・社会の鏡である。だから、地域・学校みんなが子どもに手をかけ、気をかけることが大切である。そうされた子どもたちが、今度は周りに手をかけ、声をかけるようになっていく。
- 家庭、地域、学校、様々なところでの関わりの中での支援が大切だと感じた。自分も不安をもっている親へ、当事者の立場に立って支援をしていかなければならないと改めて実感した。
- 大人でもグループLINEに連絡がきたときに、誰も返事をしないことがある。やはり“face to face”が大切。眼を見て話さないといけないと思うし、文字だけでは本心は伝わらないのではないのかと思う。向き合って話すことが大切。
- 親としてもいつも子どもを見ているといっても、コロナ禍の中、親も大変で、いろんなことでいっぱいになっているので、私たちも、地域の支援として、心を育てるお手伝いなどをしていきたい。
- キーワード「一人の子を育てるには、みんな同じ時間がかかる」というお話を聞いてまさにその通りだと感じた。それと「手をかけ、言葉をかけ〜」が自分の信念であるというのは、とても重い言葉であると感じた。子どもや親が気兼ねなく相談できるチームを編成していかなければならないと思っている。
- 新型コロナウイルスの影響で“face to face”での対応が難しい側面はあるが、今後、お互いに顔を見て、話せる雰囲気や関係性を地域の方や親御さんなどと作っていただきたい。  
ここでいただいたお話は各地区で開催される「親子の学び応援講座」等につなげ広げていただくようお願いしたい。



## 2 成果と今後の見通し

### <成果>

- 新型コロナウイルスの感染防止のため、グループ協議は行わず全体での意見発表・協議を行った。2つの情報提供から「face to face〜自己肯定感を形成するためのコミュニケーションの在り方」について、構成員一人一人それぞれの立場から専門的な話をいただくことができた。明らかになった視点は以下の通り。

- コロナ禍の中、家庭での親子関係に大きな変化があった。
- 子どもたち、家庭への地域の関わり、地域が子どもや親を積極的に認めることが必要。
- 気兼ねなく、様々なことを相談できるチーム作りを。
- LINE やメールは、トラブルを起こしやすい。“face to face”での話し合いを。

#### <今後の見通し>

- 本会議で明らかになった視点や構成員の方々の意見を反映させ、「face to face～自己肯定感を形成するためのコミュニケーションの在り方」についての研修の充実をめざしたい。